

# 日本語学習者の統語的複合動詞の意味推測の正確さ

## －記述式の場合－

谷内 美智子（国際交流基金日本語試験センター）

### 要 旨

本研究では文脈量、日本語習熟度、後項動詞の種類が統語的複合動詞の意味推測の正確さに与える影響を、記述式の解答形式を用いて検討した。後項動詞を日本語能力試験の語彙級と複合動詞の中での意味から三種類に分け、調査対象語のみの提示、単文もしくは複文内での提示のそれぞれで推測した意味を記述させた。その結果、(1)記述式では文脈量が多いほど正確に意味を推測できること、(2)日本語習熟度が高いほうが正確に意味を推測できること、(3)後項動詞のもととなっている単独動詞の知識をどの程度持っているかによって意味推測の正確さが変わること、の三点が明らかとなった。日本語習熟度と後項動詞の種類の影響は多肢選択式を扱った谷内（2012）と同じ傾向であった。しかし文脈量は多肢選択式では単文程度の文脈量の時に最も正確に意味を推測できていたことから（谷内 2012）、文脈量の影響は解答形式によって異なると考えられる。

【キーワード】 複合動詞 文脈量 日本語習熟度 後項動詞 モンゴル人日本語学習者

### 1. はじめに

日本語学習者にとって学習困難な語の一つに複合動詞がある。複合動詞が学習困難な理由として、複合動詞は学習の機会自体が少ない（森田 1978）、複合動詞として可能な動詞の組み合わせが複雑である（何 2010）、複合動詞になったときに単独動詞としての意味がどの程度保持されているかによって指導のポイントが異なる（永井 1996）といった点が挙げられる。複合動詞は語構成研究の大きなトピックの一つでもあることから（小林 2001）、複合動詞の結合条件や分類、複合動詞の後項動詞の意味的側面、「動詞＋動詞」の形が許される韓国語や中国語、タイ語などとの対照研究など、日本語学、言語学において盛んに研究がおこなわれてきた（松田 2004）。

第二言語学習者が未知の語に出会ったとき、様々なストラテジーを用いるが（Fraser 1999）、その中でも「意味を推測する」というストラテジーはどのような状況でも用いることが可能である。日本語の複合動詞の場合、「前項動詞と後項動詞の意味を足すストラテジー」（以下、V1+V2ストラテジー）を用いることが明らかとなっている（松田 2000）。しかし、複合動詞は語彙化の程度が語によって異なることもあり、前項動詞と後項動詞の意味から当該の複合動詞の意味を導き出せるとは限らな

い。例えば「切り倒す」は「切って倒す」という意味であり、元の「切る」「倒す」の意味から「切り倒す」の意味を導き出すことができる。一方の「落ち着く」は「安定した状態になる」という意味であるが、元の「落ちる」「着く」から「落ち着く」の意味を導き出すのは難しい。また、「震え上がる」は「恐ろしさなどでひどく震える」という意味である。「震え上がる」は前項動詞に単独動詞の「震える」の意味は残っているが、後項動詞の「上がる」には単独動詞の「上がる」の意味は残っていない。そのため、「落ち着く」や「震え上がる」のような複合動詞の意味を推測するときは、前項動詞と後項動詞の意味だけでなく、文脈からの情報を利用することが必要となる。

一般的に第二言語習熟度が高いほうが既知の語が多いため、文脈からの情報を利用するときも前項動詞と後項動詞の意味から当該の複合動詞の意味を推測するときも、第二言語習熟度が高いほうが正確に意味を推測できると考えられる。しかし、語の意味推測研究は漢字語彙を対象にした研究が多く、複合動詞については不明な点が多い。そこで本研究では複合動詞の意味を推測する際に、意味推測の際の文脈量、第二言語習熟度、前項動詞と後項動詞の特徴がどのように影響するかを検討する。特に、記述式という解答形式における意味推測の正確さにどのような違いがあるのかを見ていく。記述式を扱うのは、これまでの複合動詞の意味推測研究での解答形式が多肢選択式に偏っているためである（平山 2007；谷内・小森 2009；谷内 2012 など）。

## 2. 先行研究

本研究で採用する複合動詞の分類は影山（1993）の分類である。影山（1993）によると、複合動詞は統語的複合動詞と語彙的複合動詞に分けられる。統語的複合動詞は前項動詞が後項動詞の項になるものを指し、語彙的複合動詞は前項動詞が後項動詞の項にならないものを指す。影山（1993：80-92）では、統語的複合動詞と語彙的複合動詞の弁別基準として、①前項動詞を「そうする」で言い換えられるか、②前項動詞に尊敬を表す「お～になる」が使えるか、③前項動詞に受身形が使えるか、④前項動詞をサ変動詞で言い換えられるか、⑤前項動詞を重複構文にできるか、の5つが挙げられている。また影山（1993）や姫野（1999）によると、統語的複合動詞を形成する後項動詞として9分類30語が挙げられている（表1参照）。統語的複合動詞は影山（1993：80-92）で挙げられている弁別基準に該当し、かつ、表1に挙げた後項動詞が含まれるものが該当する。

統語的複合動詞と語彙的複合動詞の違いとして語彙化と意味の慣習化がある（影山 1993）。語彙化とは「2つ以上の形態的成分からなる形式が、その成分の意義と統語規則からだけでは予測のできない意義をもつにいたること」（亀井・河野・千野 1996：514）を指す。意味の慣習化の例として「飲み歩く」を取り上げる。「飲み歩く」の意味は「何件もの店を回って酒を飲む」であり、「飲む」対象は酒類に限定される。一方の統語的複合動詞の「飲み始める」の場合、「飲む」対象は酒類に限定されず、一

表1 統語的複合動詞を形成する後項動詞

完了	～終える、～終わる、～尽くす、～きる、～通す、～抜く、～果てる		
未遂	～そこなう、～損じる、～そびれる、～かねる、～遅れる、～忘れる、～残す、～誤る、～あぐねる、～そこねる		
始動	～かける、～だす、～始める、～かかる	継続	～まくる、～続ける
過剰行為	～過ぎる	再試行	～直す
習慣	～つける、～なれる、～飽きる	相互行為	～合う
可能	～得る		

※影山（1993）、姫野（1999）、姫野（2001）を参考に作成

一般的に「飲み物」とみなされるものであればよい。

語彙的複合動詞は意味の慣習化が進んでいたり語彙化の程度が語によって異なっていたりするが、統語的複合動詞には意味の慣習化や語彙化の影響はない。また表1の統語的複合動詞を形成する後項動詞を見てみると、「～始める」「～続ける」のように単独動詞の時と意味が同じものもあれば「～出す」「～切る」のように、単独動詞の時とは意味が異なるものもある。また、「～あぐねる」「～そこねる」のように、日本語能力試験（以下、JLPT）の出題基準（国際交流基金・日本国際教育支援協会 2002 以下『出題基準』）に掲載されていないために学習の機会がないと考えられるものもある。ゆえに、統語的複合動詞の意味を正確に推測できるかは前項動詞と後項動詞のもとになっている単独動詞をどの程度知っているかに影響を受けると考えられる。

日本語学習者を対象にした語の意味推測研究は漢字語彙の意味推測を扱ったものが中心で（Mori & Nagy 1999; 崔 2015 など）、複合動詞を対象にした研究は平山（2007）、谷内・小森（2009）、谷内（2012）のみである。

平山（2007）では姫野（1999）の「複合動詞になった時に単独動詞の意味がどの程度残っているか」という点を参考に語彙的複合動詞、統語的複合動詞を分類し、中国人日本語学習者を対象に意味理解の違いを多肢選択式で比較した。その結果、(1)前項動詞と後項動詞の単独動詞の意味が複合動詞の中でどの程度残っているかが意味理解に影響すること、(2)語形成のパターンに沿った正しい解釈ができるようになるにつれて、語形成パターンによる誤解釈も増える段階があることが明らかとなった。

谷内・小森（2009）では語彙的複合動詞の中でも語彙化や意味の慣習化が進んでいるものを取り上げ、モンゴル語を母語とする日本語学習者を対象に、意味推測の正確さを多肢選択式で検討した。その結果、文脈量が同程度の場合は日本語習熟度が高いほうが正確に意味を推測できるものの、正確な意味推測に必要な文脈量は日本語習熟度によって異なることが明らかとなった。

谷内（2012）では統語的複合動詞の後項動詞の種類から意味推測の正確さを多肢選択式で検討した。JLPTの語彙級と、複合動詞の中での意味が単独動詞の第一義か派生義かという点から表1に挙げた後項動詞を分け、意味推測時の文脈量と日本語習

熟度が意味推測の正確さに与える影響を検討した。その結果、単文程度の文脈量で正確に意味を推測できること、日本語習熟度が高いほうが正確に意味を推測できること、後項動詞の種類によって意味推測の正確さが異なることが明らかとなった。

これまでに行われた複合動詞の意味推測研究は数が少なく、後項動詞のもととなる単独動詞が『出題基準』に掲載されていないものやJLPTでの難易度が高いものは扱われていない。また、採用されている解答形式も多肢選択式のみである。多肢選択式は採点が簡便であるという利点がある一方、あて推量で正答する可能性があること、そして選択肢の提示によって意味推測の方向性のある程度コントロールしてしまうという欠点がある（谷内・小森 2009）。そのことから選択肢という手がかりがない記述式を採用することで、複合動詞の意味推測の実態を詳細に把握できると考えられる。

### 3. 研究課題

このように複合動詞の意味推測を扱った研究は数が少なく、統語的複合動詞の中でも難易度が高い後項動詞は対象となっていない。さらに採用されている解答形式は多肢選択式に偏っている。実際に学習者が複合動詞の意味をどのように推測し、どの程度正確に推測できるのかを把握するには、実際に推測した意味を書いてもらう記述式が適切だと考えられる。これらを踏まえ、本研究では次の研究課題を設定する。

記述式における統語的複合動詞の意味推測の正確さは、

研究課題1：意味推測時の文脈量によって違いがあるか。

研究課題2：日本語習熟度によって違いがあるか。

研究課題3：後項動詞の種類によって違いがあるか。

## 4. 研究方法

### 4. 1. 実験計画

本研究では四つの要因を設定した。第1の要因は文脈の有無（被験者内要因）で、①調査対象語のみを提示する「単独意味推測条件」、②調査対象語を一文内で提示する「文脈内意味推測条件」、の2水準である。第2の要因は文脈量（被験者間要因）で、(1) 調査対象語を単文の中で提示する「単文推測」、(2) 調査対象語を複文の中で提示する「複文推測」、の2水準である。第3の要因は日本語習熟度（被験者間要因）で、上位、中位、下位の3水準である。第4の要因は後項動詞の種類（被験者内要因）で、[1]『出題基準』の3級か4級の語で、後項動詞の意味が単独動詞として使われるときの第一義と同じもの（統語1）、[2]『出題基準』の3級か4級の語で、後項動詞の意味が単独動詞として使われるときの第一義とは異なるもの（統語2）、[3] 後項動詞が『出題基準』の1級の語か『出題基準』には掲載されていないもの（統語3）、の3水準である。なお、本研究では研究課題1「記述式における統語的複合動詞の意味推測の正確さは、意味推測時の文脈量によって違いがあるか。」に対応する要因として「文

脈の有無」と「文脈量」の二つを設定している。これらの二つの要因で、研究課題1「意味推測時の文脈量によって違いがあるか」を検討する。

#### 4. 2. 調査対象者

本研究の調査対象者はモンゴル国国内の大学に在籍する日本語学習者121名である<sup>1)</sup>。全員が日本語を主専攻もしくは副専攻で学習しており、母語はモンゴル語である。本研究では121名のうち、①SPOT\_A<sup>2)</sup>、SPOT (ver D, E)、単独意味推測テスト、文脈内意味推測テストの全てを受けていること、②SPOT\_Aの得点が25点以上であること、これらの二つの条件に当てはまる64名を分析対象とした。

SPOT\_Aの得点について条件を設けたのは、谷内・小森 (2009) や谷内 (2012) に近い日本語習熟度の者を分析対象にするためである。谷内・小森 (2009) や谷内 (2012) での調査対象者の日本語習熟度がSPOT\_Aで何点に相当するかを求めため、SPOT\_A、SPOT (ver D, E) のそれぞれの得点を用いて単回帰分析を行った。その結果、求められた回帰式は  $SPOT\_Aの得点 = 0.808 \times SPOT (ver. D, E) の得点 + 8.650$  であった。調査対象者のSPOT\_A、SPOT (ver D, E) の記述統計量と相関係数、単回帰分析の結果を表2と表3に示す。谷内・小森 (2009)、谷内 (2012) の調査対象者のSPOT (ver D, E) の最低点は20点であった。そこで、上記の回帰式に当てはめて計算したところ、SPOT\_Aでは24.81点に相当することが示された。この結果から本研究ではSPOT\_Aの得点が25点以上の者を分析対象とすることにした。

以上の手続きを経て抽出された分析対象者64名を文脈量要因で二群に、日本語習熟度要因で三群に分けた。文脈量要因による群分けは文脈内意味推測テストの冊子（「4. 4. 調査材料」を参照）をランダムに配布することで行った。日本語習熟度要因による群分けはSPOT\_Aの得点に基づいて行った。具体的には、SPOT\_Aの平均値 + 0.5標準偏差 (42) 以上を上位群、平均値 - 0.5標準偏差 (33) 以上から + 0.5標準偏差 (42) 未満を中位群、平均値 - 0.5標準偏差 (33) 未満を下位群として弁別した (表4)。

単文推測群と複文推測群、そして上位群、中位群、下位群のSPOT\_Aの得点の差を二要因の分散分析によって確認した。独立変数は文脈量 (単文推測、複文推測 被験者間要因) と日本語習熟度 (上位、中位、下位 被験者間要因) で、従属変数はSPOT\_Aの得点である。分析の結果、交互作用 ( $[F(2, 58) = .898, n.s.]$ ) と文脈量要因の主効果は有意ではなく ( $[F(1, 58) = .670, n.s.]$ )、日本語習熟度要因の主効果は有意であった ( $[F(2, 58) = 199.958, p < .01]$ )。日本語習熟度要因の主効果が有意であったため多重比較を行ったところ、上位群と中位群、上位群と下位群、中位群と下位群のいずれの間も有意であった。この結果から単文推測群と複文推測群の間に日本語習熟度の差はないが、上位群、中位群、下位群の間には日本語習熟度の差があると判断した<sup>3)</sup>。

表2 調査対象者のSPOT得点と相関係数

	N	平均値	標準偏差	最小値	最大値	相関係数
SPOT_A	121	30.48	12.09	6.00	60.00	.771
SPOT (ver. D, E)	121	27.03	11.63	3.00	54.00	

※SPOT\_Aは65点満点、SPOT (ver. D, E) は60点満点

表3 SPOT\_Aを従属変数とした回帰分析の結果

変数	B	標準誤差	t値	$\beta$	p値
切片	8.650	1.795	4.819		.000
SPOT (ver.D, E)	.808	.061	13.215	.771	.000

$R^2 = .595$  S.E. = 6.732

表4 分析対象者のSPOT\_Aの得点

		平均値	標準偏差	最小値	最大値	N
単文 推測群	上位	47.88	4.26	42.00	54.00	8
	中位	35.78	2.22	33.00	40.00	9
	下位	27.27	1.62	25.00	30.00	11
	単文推測群全体	35.89	8.94	25.00	54.00	28
複文 推測群	上位	47.50	4.32	42.00	57.00	12
	中位	36.00	3.24	33.00	41.00	13
	下位	29.36	1.96	26.00	32.00	11
	複文推測群全体	37.81	8.15	26.00	57.00	36
全体		36.97	8.49	25.00	57.00	64

※SPOT\_Aは65点満点

#### 4. 3. 調査対象語

本研究では統語的複合動詞56語を調査対象語とした。選定には影山（1993）、姫野（1999）などを参照したが、分析対象としたのはそのうち46語である。分析対象とした前項動詞および後項動詞の条件と分析対象語の一覧を表5に示す。

#### 4. 4. 調査材料

本研究では意味推測条件として単独意味推測条件、文脈内意味推測条件を設けた。これは実験計画の第1の要因「文脈の有無」に該当する。単独意味推測条件では「単独意味推測テスト」の中で調査対象語のみを提示した。文脈内意味推測条件では調査対象者を「単文推測群」と「複文推測群」に分けた。これは実験計画の第2の要因「文脈量」に該当する。単文推測群には調査対象語を共起語とともに、複文推測群には共起語と意味推測を促すと考えられる表現とともに調査対象語を提示した。提示文

表5 分析対象の条件と分析対象語

前項動詞／後項動詞の条件		分析対象の複合動詞
前項動詞	：『出題基準』の3級か4級の単独動詞	
統語1の後項動詞 (17語)	：単独動詞としての出題基準の級は3級か4級で、複合動詞の中での後項動詞の意味が単独動詞のときの第一義と同じもの。	歩き始める、登り始める、働き始める、歌い終わる、書き終わる、やり終わる、買い忘れる、かけ忘れる、聞き慣れる、食べ慣れる、履き慣れる、出遅れる、逃げ遅れる、乗り遅れる、鳴り続ける、走り続ける、読み続ける
統語2の後項動詞 (19語)	：単独動詞としての出題基準の級は3級か4級で、複合動詞の中での後項動詞の意味は、単独動詞の派生義のもの。	洗い直す、考え直す、作り直す、教え合う、出し合う、褒め合う、踊り出す、降り出す、笑い出す、泳ぎ切る、使い切る、読み切る、書きかける、食べかける、消えかかる、死にかかる、食べつける、飲みつける、履きつける
統語3の後項動詞 (10語)	：単独動詞としての語彙級が1級か級外のもの。	言い損なう、言い損じる、書き損じる、考えあぐねる、探しあぐねる、聞き誤る、踏み誤る、聞き損ねる、渡し損ねる、知り尽くす

内の調査対象語には下線を引くことで意味を推測してほしい語を示した。また、文脈内意味推測テストでの提示文は『現代書き言葉均衡コーパス少納言』などのコーパスを参照しながら作成し、『出題基準』の2級以上の単語にはモンゴル語での語注を付した。さらに単独意味推測テスト、文脈内意味推測テストともに使用されている漢字には全てルビを付した。表6に、統語1、統語2、統語3のそれぞれの意味推測条件ごとの提示文とモンゴル語での語注の一例を示す。

表6 意味推測条件ごとの提示文の例

	意味推測条件	提示文	モンゴル語訳を付した語
統語1	単独意味推測	か お 書き終わる	原稿：эх ноорог төсөл 報告書：тайлан
	文脈内意味推測	げんこう か お 原稿を書き終わった。 やつとこのげんこう か お つぎ 報告書を書かなければならない。	
統語2	単独意味推測	あら なお 洗い直す	
	文脈内意味推測	あら なお シャツを洗い直した。 いっかいあら 一回洗っただけではきれいにならなかった ので、シャツをあら なお 洗い直した。	
統語3	単独意味推測	ふ あやま 踏み誤る	ブレーキ：тоормос アクセル：хурдасгуур, хааз
	文脈内意味推測	ふ あやま ブレーキとアクセルを踏み誤った。 このこうつうじこ 交通事故は、ブレーキとアクセルをふみ あやま 誤ったのが原因で起きた。	

本研究で採用した解答形式は調査対象者の母語であるモンゴル語で意味を書く記述式である。本研究では単独意味推測テスト、文脈内意味推測テストの両方ですべての調査対象語を提示している。そのため、順序効果を排除するために文脈内意味推測テストはダミーを含めて提示順を入れ替えた冊子を10種類用意した。

#### 4. 5. 調査手続き

調査は2010年10月に、授業時間を利用して3日に分けて実施した。初日にSPOT\_Aと単独意味推測テストを行い、その数日後に文脈内意味推測テストを行った。文脈内意味推測テストの冊子は10種類をランダムに配布した。そして文脈内意味推測テストの数日後にSPOT (ver. D, E) を実施した。単独意味推測テストと文脈内意味推測テスト実施の際には、①調査対象語の意味をモンゴル語で書くこと、②辞書は使用できないこと、③前のページには戻ることはできないこと、以上をテスト冊子の中でモンゴル語で教示した。

#### 4. 6. 得点化の手続きと分析方法

得点化にあたって、まず、調査対象者がモンゴル語で記述した意味を日本語に翻訳してもらった。モンゴル語から日本語への翻訳は、モンゴル語を母語とする日本語教師に依頼した。翻訳の後、正答と誤答に分類した。分類は10年以上の教授経験と修士号を持つ日本語教師2名と筆者の3名で行い、3名中2名以上が一致した分類を採用した。3名とも分類が一致しないものは、協議の上分類を決定した。そして、正答を1点、誤答を0点として採点し、分散分析を行って平均点を比較した。

### 5. 結果

#### 5. 1. 記述統計量

文脈の有無、文脈量、日本語習熟度、後項動詞の種類ごとの平均点と標準偏差を表7に示す。統語1が17語、統語2が19語、統語3が10語と後項動詞の種類によって満点が異なるため、比較のしやすさを考慮して100点満点に換算した結果を示す。

表7の平均点を比較すると全体的に平均点は高くなく、単独意味推測条件、文脈内意味推測条件ともに0点から60点台の範囲である。文脈の有無（単独意味推測条件と文脈内意味推測条件）で比べると、統語1と統語3は単文推測群、複文推測群ともに文脈内意味推測条件の方が平均点が高い。統語2は単文推測群の上位群と下位群では文脈内意味推測条件の方が平均点が高いが、単文推測群の中位群、複文推測群の上位群、中位群、下位群では文脈内意味推測条件の方が平均点が高い。そして文脈量（文脈内意味推測条件における単文推測群と複文推測群）の場合、統語1、統語2、統語3のいずれにおいても、そして、上位群、中位群、下位群のいずれにおいても単文推測群より複文推測群の方が平均点が高い。



表7 意味推測条件、文脈量、日本語習熟度、後項動詞の種類ごとの結果

			単独意味推測条件			文脈内意味推測条件		
			統語1	統語2	統語3	統語1	統語2	統語3
全体 (N = 64)	単文推測群 (N = 28)	平均	50.21	12.03	0.36	52.52	12.03	3.21
		標準偏差	17.86	12.72	1.89	19.21	11.89	7.23
	複文推測群 (N = 36)	平均	51.31	14.04	1.11	58.50	26.17	15.56
		標準偏差	18.85	13.84	3.19	20.52	20.46	19.63
上位群 (N = 20)	単文推測群 (N = 8)	平均	58.83	19.08	0.00	59.56	15.79	1.25
		標準偏差	20.38	19.27	0.00	20.48	17.79	3.54
	複文推測群 (N = 12)	平均	61.76	24.12	2.50	66.67	41.67	25.00
		標準偏差	15.16	16.56	4.52	17.61	20.75	25.76
中位群 (N = 22)	単文推測群 (N = 9)	平均	50.33	10.53	1.11	52.94	15.21	6.67
		標準偏差	15.87	7.44	3.33	23.16	8.51	11.18
	複文推測群 (N = 13)	平均	46.15	12.55	0.77	58.82	22.67	13.85
		標準偏差	17.46	10.20	2.77	21.34	16.56	18.05
下位群 (N = 22)	単文推測群 (N = 11)	平均	43.85	8.13	0.00	47.06	6.70	1.82
		標準偏差	16.29	8.61	0.00	14.17	7.10	4.05
	複文推測群 (N = 11)	平均	45.99	4.78	0.00	49.20	13.40	7.27
		標準偏差	20.68	4.97	0.00	20.25	13.39	6.47

日本語習熟度ごとに平均点を比較する。単文推測群の統語1と統語2では単独意味推測条件、文脈内意味推測条件のいずれも日本語習熟度が高いほうが平均点が高いが、統語3では中位群の平均点が最も高い。複文推測群では統語1、統語2、統語3のいずれにおいても文脈の有無に関係なく日本語習熟度が高いほうが平均点が高い。

後項動詞の種類ごとに平均点を比較する。単独意味推測条件、文脈内意味推測条件ともに統語3、統語2、統語1の順で平均点が高くなっている。また、文脈内意味推測条件の単文推測群と複文推測群を比べてみても、統語3、統語2、統語1の順で平均点が高くなっている。

## 5. 2. 四要因の分散分析

文脈の有無、文脈量、日本語習熟度、後項動詞の種類の四つの要因によって意味推測の正確さに違いがあるかを検討するため、四要因の分散分析を行った。独立変数は①文脈の有無（文脈なし、文脈ありの2水準で被験者内要因）、②文脈量（単文推測、複文推測の2水準で被験者間要因）、③日本語習熟度（上位、中位、下位の3水準で被験者間要因）、④後項動詞の種類（統語1、統語2、統語3の3水準で被験者内要因）の4つである。従属変数は、単独意味推測テストおよび文脈内意味推測テストの得点である。四要因の分散分析の結果を表8に示す。

分析の結果、交互作用は「文脈の有無×文脈量」のみが有意であった。文脈の有無

要因、文脈量要因、日本語習熟度要因、後項動詞の種類要因の主効果は有意であった。

「文脈の有無×文脈量」の1次の交互作用が有意であったため、「文脈の有無×文脈量」について単純主効果の検定を行った。文脈の有無要因の各水準における文脈量要因の影響を検討したところ、文脈なし条件では文脈量要因の主効果は有意ではなく ( $[F(1, 58) = .113, n.s.]$ )、文脈あり条件では文脈量要因の主効果が有意であった ( $[F(1, 58) = 11.141, p < .01]$ )。文脈量要因の各水準における文脈の有無要因の影響を検討したところ、単文推測群では文脈の有無要因の主効果が有意ではなく ( $[F(1, 58) = .706, n.s.]$ )、複文推測群では文脈の有無要因の主効果が有意であった ( $[F(1, 58) = 40.044, p < .0001]$ )。この結果から、意味推測の際に文脈からの情報が利用できない条件では、単文推測群と複文推測群の間に意味推測の正確さに違いはなく、意味推測の際に文脈からの情報が利用できる場合、複文推測群のほうが単文推測群よりも正確に意味を推測できるようになると言えるだろう。

要因の主効果が有意だった日本語習熟度要因、後項動詞の種類要因について多重比較を行ったところ、日本語習熟度要因については、上位群と中位群、上位群と下位群の間の差がそれぞれ有意であったが、中位群と下位群の間の差は有意ではなかった。

表8 四要因の分散分析の結果

変動因	平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率
文脈量	2787.898	1	2787.898	5.536	.022
日本語習熟度	9378.187	2	4689.093	9.312	.000
文脈量×日本語習熟度	1492.222	2	746.111	1.482	.236
誤差	29206.639	58	503.563		
文脈の有無	3815.078	1	3815.078	23.064	.000
文脈の有無×文脈量	2071.708	1	2071.708	12.524	.001
文脈の有無×日本語習熟度	342.251	2	171.126	1.035	.362
文脈の有無×文脈量×日本語習熟度	431.050	2	215.525	1.303	.280
誤差	9593.965	58	165.413		
後項動詞の種類	159957.934	2	79978.967	363.419	.000
後項動詞の種類×文脈量	375.516	2	187.758	.853	.429
後項動詞の種類×日本語習熟度	1824.879	4	456.220	2.073	.089
後項動詞の種類×文脈量×日本語習熟度	327.333	4	81.833	.372	.828
誤差	25528.570	116	220.074		
文脈の有無×後項動詞の種類	257.740	2	128.870	1.407	.249
文脈の有無×後項動詞の種類×文脈量	257.428	2	128.714	1.405	.249
文脈の有無×後項動詞の種類×日本語習熟度	193.177	4	48.294	.527	.716
文脈の有無×後項動詞の種類×文脈量×日本語習熟度	387.414	4	96.854	1.058	.381
誤差	10623.626	116	91.583		

また、後項動詞の種類要因については、統語1と統語2、統語1と統語3、統語2と統語3のそれぞれの間の差が有意であった。この結果から、日本語習熟度要因については、上位群程度の日本語習熟度になって初めて正確に意味を推測できるようになり、後項動詞の種類要因については、統語3、統語2、統語1の順で正確に意味を推測できるようになると言えるだろう。

## 6. 考察

### 6. 1. 研究課題1 文脈量による意味推測の正確さの違い

研究課題1について検討する。四要因の分散分析で研究課題1に対応する独立変数は文脈の有無要因と文脈量要因である。分析の結果、調査対象語のみの提示と単文での提示では意味推測の正確さに違いがなく、複文での提示で正確に意味を推測できるようになることが明らかとなった。多肢選択式での統語的複合動詞の意味推測を扱った谷内(2012)では、単文程度の文脈量で最も正確に意味を推測できていた。一方の本研究では、複文での提示で正確に意味を推測できていたことから、記述式で正確に意味を推測するには、より多くの文脈量が必要であることを意味している。

谷内(2012)での多肢選択式と本研究での記述式の違いは、選択肢による意味の提示の有無である。両者とも単文での提示文は調査対象語と共起語で構成され、複文での提示文は調査対象語と共起語に加え、意味推測を促すと考えられる表現を付加している。両者は提示文の文脈量という点では同程度であるものの、実際の意味推測で使える情報という点では本研究の記述式のほうが情報が少ない。なぜなら実際の意味推測の過程では選択肢で提示された意味も、意味推測の手がかりとなるからである。

学習者は未知の複合動詞に出会ったときは、松田(2000)の言うV1+V2ストラテジーを意味推測のストラテジーとして用いることが多く、この時に活用されるのは前項動詞、後項動詞の元になっているそれぞれの単独動詞の知識である。もしV1+V2ストラテジーで意味推測がうまくいかなかったり推測した意味が正しいかを検証したりする場合、文脈からの情報を利用する必要が出てくる。複合動詞の意味推測は、まずV1+V2ストラテジーを用い、次に文脈からの情報を照合するという過程を、解答形式に関係なく経ていくと考えられる。

しかし、記述式にはなく多肢選択式に特有の段階として、意味推測の過程で推測した意味を選択肢で示された意味と照合する段階が挙げられる。選択肢に示された意味のうちどれか一つは正しい意味であることから、正答を選ぶこと、すなわち意味を正確に推測することは記述式に比べると容易であるだろう。このことから、谷内(2012)での多肢選択式と本研究の記述式で正確な意味推測に必要な文脈量が異なっていた理由として、選択肢が意味推測に与える影響が考えられるだろう。

## 6. 2. 研究課題2 日本語習熟度による意味推測の正確さの違い

研究課題2について検討する。分析の結果、上位群になって初めて正確に意味を推測できることが明らかとなった。多肢選択式での統語的複合動詞の意味推測を扱った谷内(2012)では日本語習熟度が高いほうが正確に意味を推測できていた。記述式を扱った本研究でも日本語習熟度が高いほうが正確に意味を推測できていたことから、統語的複合動詞の意味推測では、解答形式に関係なく日本語習熟度が高いほうが正確に意味を推測できると言える。

語の意味推測では一般的に第二言語習熟度が高いほうが正確な意味推測には有利である。それは、文脈を理解して意味推測の手がかりを得るうえで必要な語彙知識、文法知識の量が、第二言語習熟度が高い者の方が多く持っているためである。複合動詞の意味推測の場合、文脈からの情報だけでなくV1 + V2ストラテジーも活用される。文脈からの情報を活用する際にもV1 + V2ストラテジーを用いる際にも一定量の語彙知識は必要なことから、第二言語習熟度が意味推測の正確さに影響すると言える。

本研究で対象にした統語的複合動詞は前項動詞が『出題基準』の3級か4級の単独動詞である。後項動詞は統語1が『出題基準』の3級か4級の語で意味は単独動詞で使われるときの第一義と同じもの、統語2は『出題基準』の3級か4級の語で意味は単独動詞で使われるときの第一義とは異なるもの、統語3は『出題基準』の1級の語か『出題基準』には掲載されていない語である。本研究で対象にした統語的複合動詞は、前項動詞や後項動詞のもととなる単独動詞の知識があれば、前項動詞と後項動詞のそれぞれの意味から当該の複合動詞を推測することができる。また、本研究で対象にした複合動詞に含まれる前項動詞と後項動詞は、統語3以外は初級を終了するまでに学習する単独動詞がもとになっている。日本語習熟度が高いほうが語彙知識は豊富であることから、「V1 + V2ストラテジー」を用いやすい統語的複合動詞の意味推測では、日本語習熟度が高いほうが正確に意味を推測できたと考えられる。

## 6. 3. 研究課題3 後項動詞の種類による意味推測の正確さの違い

研究課題3について検討する。分析の結果、統語3、統語2、統語1の順で正確に意味を推測できることが明らかとなった。

まず谷内(2012)で扱われていなかった統語3について述べる。統語3は後項動詞のもとになっている単独動詞の語彙級が『出題基準』の1級か級外のものである。単独動詞としての語彙級の面からみると、統語3は学習の機会は多くない。統語3の意味を推測するのに必要な知識が少ないために、意味を推測するということが非常に困難であったと考えられる。ゆえに統語3は特に単独意味推測条件や文脈内意味推測の単文条件群で正答率の平均が10点にすら満たなかったと考えられる。

次に谷内(2012)でも扱っていた統語1と統語2について述べる。統語3と統語1、統語2の違いは『出題基準』の語彙級である。統語1と統語2は後項動詞のもととな

る単独動詞の語彙級が3級か4級である。語彙級の面から考えると、統語3よりも統語1、統語2のほうが学習の機会が多い。ただし、統語1と統語2は後項動詞の意味が単独動詞の時の第一義か派生義かという点で異なる。

平山(2007)では前項動詞と後項動詞の中で単独動詞としての意味がどの程度残っているかが複合動詞の意味理解に影響することが明らかとなっている。平山(2007)での「単独動詞の意味がどの程度残っているか」は単独動詞の第一義か派生義かであり、その単語の語義をどこまで知っているかは第二言語習熟度によって異なると考えられる。ゆえに、後項動詞の語義の面からの知識の差は、複合動詞の中で単独動詞の意味がどの程度残っているかと関連する。語義の面からの知識の差、すなわち複合動詞の中で単独動詞の意味がどの程度残っているかが、統語2と統語1の意味推測の正確さに反映されたものと考えられる。

## 7. まとめと今後の課題

本研究では記述式における統語的複合動詞の意味推測の正確さについて検討した。文脈量については正確に意味を推測するためには複文程度の文脈量が必要であること、日本語習熟度が高いほうが正確に意味を推測できること、そして後項動詞の種類によって意味推測の正確さが異なることが明らかとなった。

本研究の今後の課題として次の四点を挙げる。一点目は調査対象語の選定基準の精緻化である。本研究では『出題基準』での語彙級と後項動詞の意味という点から調査対象語を選定したが、これらの複合動詞が日本語母語話者にとってどの程度推測できるものかという点を考慮していない。今後の調査ではこの点も考慮していきたい。

二点目は正確な意味推測につながる文脈についての整理である。本研究では文脈量を単文と複文で区別しているが、推測対象となる語の意味と文脈からの情報の関連性といった点からの整理が不十分である。一点目に述べた調査対象語の選定基準の精緻化と合わせて、今後の調査で反映させたい。

三点目は調査対象者が記述した意味の分析である。本研究では「推測した意味が調査対象語の意味かどうか」という正確さの点からのみ分析した。そのため特に統語3では「正確に意味を推測できるか」という点からは非常に平均点が低かった。しかし記述された意味を見てみると、意味推測自体ができなかったというわけではなく、何かしらの意味が書かれているというケースが多かった。そのことから、記述された意味を分析することで統語的複合動詞の意味推測の特徴がより明確になると考えられる。

四点目は記述式における語彙的複合動詞の意味推測の検討である。語彙的複合動詞は平山(2007)や谷内・小森(2009)で扱われてきたが、いずれも多肢選択式を採用していた。記述式を扱った研究自体が少ないため、記述式での意味推測の正確さや記述した意味については不明な点が多い。語彙的複合動詞も対象にすることで、日本語

学習者による複合動詞の意味推測への示唆がより多く得られるようになるだろう。

## 注

- 1) 本研究でモンゴル語を母語とする日本語学習者を対象にしたのは学習者の母語の知識のうち特に漢字知識の影響を排除したかったことと、モンゴル語を母語とする日本語教師の協力を得られたことによる。なお、調査対象者の出身国のモンゴル国で使用されているモンゴル語では表記にキリル文字を採用しているため、日常生活で漢字に触れる機会はほとんどないと考えられる。
- 2) SPOTは学習者の総合的な日本語能力を短時間で測定するテストで、現在は『筑波日本語テスト集』として利用可能である。
- 3) 本研究は有意水準を5%に設定し、多重比較にフィッシャーのLSD検定を用いた。

## 参考文献

- 何志明 (2010) 『現代日本語における複合動詞の組み合わせ—日本語教育の観点から—』 笠間書院
- 影山太郎 (1993) 『文法と語形成』 ひつじ書房
- 亀井孝・河野六郎・千野栄一 (1996) 『言語学大辞典第6巻—述語編—』 三省堂
- 現代書き言葉均衡コーパス少納言  
< <http://www.kotonoha.gr.jp/shonagon/> > (2017年9月10日 アクセス)
- 国際交流基金・日本国際教育支援協会 (2002) 『日本語能力試験出題基準【改訂版】』 凡人社
- 小林英樹 (2001) 「複合動詞の文法」『日本語学』 20、30-38
- 崔娉 (2015) 「中国語を母語とする日本語学習者における未知漢字語彙の意味推測」『第二言語としての日本語の習得研究』 18、103-119
- 筑波日本語テスト集 | TTBJ  
< <http://ttbj-tsukuba.org/> > (2018年1月16日 アクセス)
- 永井鉄郎 (1996) 「日本語複合動詞の教育について」『日本語教育』 88、140-151
- 姫野昌子 (1999) 『複合動詞の構造と意味用法』 ひつじ書房
- 姫野昌子 (2001) 「複合動詞の性質」『日本語学』 20、6-15
- 平山允子 (2007) 「中国人日本語学習者による「V1 + V2」型複合動詞の理解—Dual mechanism modelの応用可能性—」『言語科学論叢』 11、東北大学、59-69
- 松田文子 (2000) 「複合動詞の意味理解方略の実態と習得困難点」『言語文化と日本語教育』 20、52-65
- 松田文子 (2004) 『日本語複合動詞の習得研究—認知意味論による意味分析を通して—』 ひつじ書房
- 森田良行 (1978) 「日本語の複合動詞について」『講座日本語教育』 早稲田大学語学教

育研究所、69-86

谷内美智子・小森和子（2009）「第二言語の未知語の意味推測における文脈の効果—語彙的複合動詞を対象に—」『日本語教育』142、113-122

谷内美智子（2012）「後項動詞の種類からみた日本語学習者の統語的複合動詞の意味推測の特徴—文脈量と日本語習熟度の影響を中心に—」『言語文化と日本語教育』44、1-10

Fraser, C. A. (1999). Lexical processing strategy use and vocabulary learning through reading. *Studies in Second Language Acquisition*, 21, 225-241.

Mori, Y. & Nagy, W. E. (1999). Integration of information from context and word elements in interpreting novel kanji compounds. *Reading Research Quarterly*, 34, 80-101.

本論文はお茶の水女子大学大学院人間文化研究科に提出した博士論文の一部を加筆修正したものです。ご協力くださった方々に心より感謝申し上げます。